

## 審査員評①

羊屋 白玉（「指輪ホテル」芸術監督、演出家、劇作家、俳優、ソーシャルワーカー）

「移動の距離は思考の距離」

審査会が始まる前に「アートインレジデンスって、アーティストの人生が変わることもあるのよ」「レジデンス先の方々のアーティストに対しての萌え具合も重要なのよ」という名言が耳に入り、なるほど！と目から鱗、と同時に、とても緊張しました。

事前にいただいていた応募内容からは、アーティストたちが、初めての場所に想いを馳せつつ、自分の活動を重ね合わせる作業についてどのように考えているかに着目していました。

そのような、アーティストの経験と嗅覚をも含めて審査するのはとても難しかったのですが、例えば、AIS と長年の付き合いのあるアーティストに関しては、この経験が、今後、彼ら彼女らの未来にどう関わって行けるのだろうかという計らいや、初めての応募の方への期待やモチベーションの置き所など、受け入れ先との相性も含めて、やわらかな部分を探っていくような審査会でした。

わたしは、札幌出身ではあるのですが、東京ベースで長らく活動をしてきたこともあり、札幌演劇に特化したウェブサイトの編集長、佐久間泉真にも審査に協力してもらいました。世代の幅が広がった審査会になったかなと思っています。ありがとうございました。

それと、わたくしごとですが、ハウスと呼ばれているのですが（Hokkaido Artists Union Studies 頭文字で HAUS です）、北海道のアーティストの活動・労働を考える会を続けております。

AIS さんの、アウトリーチにおけるアーティスト活動・創作支援に、何かしらお手伝いできることがあったら、繋がって行けたらと思っていましたし、今回の審査会参加で AIS さんの活動に理解が深まりました。

そして、この冬の北海道のどこかにアーティストが生息して、何かあたたかいものが生まれているその様子を、今から勝手に想像しております。楽しみです。